

# 法説辻

岩手県曹洞宗布教師会三分間法話

## 宮沢賢治と東山町

藤沢町・寶珠寺住職

小野一芳

昭和五年（一九三〇年）六月に、東山町陸中松川駅前の東北砕石工場社長の鈴木東蔵が、自分の生産している炭酸石灰の広告文を書いて貰ったお札に、花巻の宮沢賢治の家を訪ねて行きました。

翌年の昭和六年一月に鈴木東蔵は「工場技師を命ず」という辞令を賢治に送ったのでした。四月に賢治は東山町松川の砕石工場へはじめて来ました。賢治はいつも工場の人夫達に、お酒や生菓子をお土産に持つてきては、人夫達と懇談したのでした。

昭和五年（一九三〇年）六月に、東山町陸中松川駅前の東北砕石工場社長の鈴木東蔵が、自分の生産している炭酸石灰の広告文を書いて貰ったお札に、花巻の宮沢賢治の家を訪ねて行きました。

翌年の昭和六年一月に鈴木東蔵は「工場技師を命ず」という辞令を賢治に送ったのでした。四月に賢治は東山町松川の砕石工場へはじめて来ました。賢治はいつも工場の人夫達に、お酒や生菓子をお土産に持つてきては、人夫達と懇談したのでした。

そして、九月十九日に、砕石工場のため壁材の化粧煉瓦と炭酸石灰の見本やパンフレットなど、四十kgに

もなるものを大きなトラックに詰め込んで上京しました。

この日は仙台に泊まりましたが、隣の人がうるさくてよく眠れず、翌朝四時の列車で東京へ向かいました。車中ではぐっすり眠りましたが、途中で窓を開けたまま降りた人がいて、それで風邪を引き東京へ着いたときは、全身ガタガタふるえていました。

いつもの駿河台の旅館に入りましたが、体調は悪化し九月二十七日には「もう私も終わりとなりました。それで最後に、お父さんの声が聞きたくなりました」と花巻の父へ電話をしたのでした。父は驚いて知人へ電報を打ち、寝台車で帰る

ように依頼しました。賢治は、よく二十八日に花巻に帰ってききました。それからの賢治は「うつつと病床に臥していました。あの有名な「雨ニモマケズ」の詩はこの年、昭和六年十一月三日に書かれたのです。

「雨ニモマケズ／風ニモマケズ／雪ニモ、夏ノ暑サニモマケヌ／丈夫ナカラダヲモチ／欲ハナク／決シテ曠ラズ／イツモシズカニワラツテキル…」私はこの宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩の心を、自分の心として生きていきたいと思っています。

曹洞宗岩手県宗務所

# テレホン法話

☎ 0120-62-1602

ほとけに  
出会う

心に残る  
法話を  
お聞き  
下さい